

(7) 天頂引力の影響を時間を隔てての觀測から認め得るか。

この意見に基いて一部の觀測者は大いに努力せられた爲、或る種類の疑點は解決出來たが、現在にても全部については徹底的な解決は出來てゐない。今後微光流星觀測に着手せらるる人や、引つづき觀測を繼續されてゐらるる人も一層この方面に留意していただきたい。

屢々のべた様に微光流星の觀測は、輻射點の移動、流星群の活動狀態、從屬的輻射點の存在等等、その解決に甚大の役割を演ずるものであるから、この部門の開拓發展は非常に重要である。

微光流星の肉眼的觀測とともに考ふべき問題は、その望遠鏡的觀測である。この目的には勿論前と同様な目的がふくまれてゐるが、其の外に、肉眼程度以下の7等乃至9等位のものの觀測が可能の點から宇宙塵の本體を調査する目的をもつものである。何れも口径は出来るだけ大で極めて低倍率の望遠鏡を用ひて行はねばならない。

エストニアの Tartu 天文臺の Öpik は望遠鏡的流星の二重觀測を行ひ、微光流星出現の眞高度、各光度に對す流星數の頻度、地球の日週運動(自轉)に伴ふ流星數の變化、見かけの飛行方向の如きものを求めてそれから興味のある結論を導いてゐる。(Publications de L'observatoire Astronomique de L'Université de Tartu, Tome XXVII No. 2, Tartu, 1930) 故にこれらの觀測の結果から諸種の統計的研究をして見ることは甚だ有意義のことと思ふ。

× × × ×

はじめの考へでは以上の外に、停止輻射點の問題、Factor の問題、流星の寫眞觀測等についても述べるつもりでゐたが、材料がととのはなかつたり、多忙であつたりした爲め、この邊で筆をおくことにした。誠につまらぬことをのべて貴重紙面を汚し何とも御わびのない次第でした。(1933. 7. 5夜)

悲 し き 知 ら せ

本年初以來花山天文臺で天體寫眞を研究してゐられた若き 三宅義夫 君は去八月 9 日郷里宮津で病歿。又、數年前より流星觀測を勵んでゐられた廣島の 長谷秋男 君も八月に郷里で病死された由。